

## 巻 頭 言

# 衆山の小なるを覽るべし

この『経済学雑誌別冊・講義資料』は、本年度の講義のための「資料」を掲載していますが、この「別冊」に書かれてある「資料」の領域は経済学の様々な領域を網羅しています。真剣に経済学に取り組むためにはこの「資料」の数倍の著作、論文等を読破してゆかねばなりません。その道案内の役割をこの「資料」は提供しています。経済学の取り扱う分野は常に変化し、拡大していますが、経済学を学ぼうとする者にとっては、日々変化しつつある様々な社会現象を経済学的な観点から分析することが重要であり、新しい問題にこのような経済学的視点からの分析がなされて、より一層の経済社会の理解が得られてゆくというように、日々経済学の発展がなされてきています。したがって、学生諸君には、社会の問題に常に興味を持ち、それを経済学的な視点から眺め、分析しようとする意欲を持ってもらいたい。

経済学を学ぶ者は、今世紀の最大の経済学者の一人であるケインズの次の言葉を常に念頭に置く必要があると思いますので、それを紹介しましょう。経済学を学ぼうとする者は「ある程度まで、数学者で、歴史家で、政治家で、哲学者でなければならない。彼は記号も分かるし、言葉も話さなければならない。彼は普遍的な見地から特殊を考察し、抽象と具体とを同じ思考の動きの中で取り扱わねばならない。彼は未来の目的のために、過去に照らして現在を研究しなければならない。人間の性質や制度のどんな部分も、まったく彼の関心の外にあってはならない。彼はその気構えにおいて目的意識に富むと同時に公平無私でなければならない。幻術家のように超然として清廉、しかも時には政治家のように世俗に接近していなければならない。」（『ケインズ全集』第10巻より）という。超一流の経済学者ですらこのような条件を持っているわけではありませんが、経済学者はケインズの意見に同意しなくとも、これに近い考えを持って日々経済学の貢献に努力しているはずです。

新年度の開始にあたり、この『経済学雑誌別冊』を利用して、講義に臨み、さらに学生諸君の経済学への良きガイド・ブックとなることを期待しています。若き杜甫が「会ず当に絶頂を凌ぎて 一たび衆山の小なるを覽るべし」（『杜甫詩選』岩波文庫より）と歌ったように、諸君もこのような気概をもって経済学に取り組んでもらいたいものです。

1997年4月

大阪市立大学経済学会会長

服 部 容 教